

多面的・多角的な思考力を育てる社会科授業 ～つながり、かさなり、ひろがる授業をめざして～

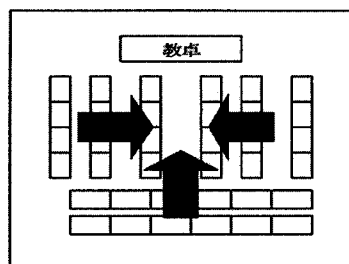
社会科 南岡俊之 吉田裕亮 吉田昂平

1. 主題設定の理由

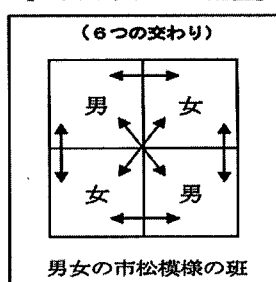
平成20年「中学校学習指導要領」改訂において、中学校社会科の基本的な方針は「基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得」「言語活動の充実」「社会参画、伝統や文化、宗教に関する学習の充実」と挙げられている。また、本校では小中高協同研究主題として『つながり、かさなり、ひろがる授業～12年間の「知」の構築をめざして～』を掲げ、昨年度より研究実践に取り組んでいる。グローバル化が進む現代において、単なる知識や技能だけではなく、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、課題解決力、他者と関係を築く力、豊かな人間性などが総合的に育成され、多面的・多角的な見方・考え方により新たな価値観を形成していくことは大切である。そこで、社会科においては、「多面的・多角的な見方・考え方の獲得を通じた、ある事象への価値判断・意志決定を行うことのできる能力」を「知」と定義し研究を進めている。

社会科の「知」の獲得に向けて、これまで培ってきたコミュニケーション力を基盤としたさらなる思考力・判断力・表現力の育成を重視した。ここで言う思考力・判断力・表現力とは、自ら課題を見出し、その事象について多面的・多角的に考察し、諸資料や仲間との対話や議論を通して自らの思考や判断を再構築してまとめ、それを効果的に発信していく力のことである。こうした力の育成と、それらを支える基礎的・基本的な知識や技能の習得のために本校社会科は大阪府公立中学校社会科教育研究会（以下、府中社）とも連携し、「コの字」「4人グループ」を基本とした「協同的な学び」の手法を取り入れた学習に取り組んできた。コの字では、生徒が互いに表情を見ながら発言をするので対話活動が促進される（図Ⅰ参照）。4人グループは男女混合の市松模様配置することで、同性同士の情報交換から異性との対話へと広がり、それぞれが交わりながら主体的に課題に取り組むことができる（図Ⅱ参照）。

図Ⅰ 【コの字型の教室（発言の向き）】



図Ⅱ 【4人のグループ配置】



（←府中社研究発表基調提案より）

いわゆる従来型の「知識注入型」や「一斉授業型」から「協同的な学び」の手法を取り入れた授業を実践することで、生徒の意欲的で主体的な学びの姿勢が多く確認することができただけでなく、事象に対する考察も一面的・一方的な見方・考え方から、諸資料に根拠を見出した客観的な思考や多面的・多角的な見方・考え方ができるようになってきた。自ら学び、共に成長する過程が生徒の中で実感でき、さらなる興味・関心へとつながっていく「協同的な学び」は個人思考と集団思考の相互通行を活発化させ、多面的・多角的な思考力を育てていくのに効果的であることは注目に値する。

2. 実践の概要

【実践事例1】

(1) 題材

「アジア・太平洋での戦争」～アメリカとの戦い～

(2) 目標

日本と欧米やアジア諸国との関わりを通して、第二次世界大戦までの経過や大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解するとともに平和の大切さに気づく。

(3) 学習内容

戦後 69 年を迎え、もはや第二次世界大戦は多くの人々にとって過去の歴史上の出来事となりつつある。2014 年現在、戦前生まれの人口は日本の総人口の約 20% となり、これは今後ますます減少の一途をたどる。戦争体験者が減少していくなかで、いかにして戦争の恐ろしさを後世に伝えていくかが課題といわれている。また、連日のように宗教や領土をめぐる地域紛争や近隣諸国との諸問題、日本国憲法改正の是非、集団的自衛権にかかわる議論などが報道され、平和が問われている。このような現代社会において、今一度、戦争の恐ろしさや平和の大切さに気づかせることはとても重要であり、学校教育が担う役割は大きいといえる。

本単元では「第二次世界大戦が起こった原因は何だったのか」という課題にグループで迫ることで、さまざまな視点から課題を捉え、対話を通して思考を練り上げ、仲間の発表を参考に自分の思考を再構築させていきたい。その思考の過程で、2 度と同じ過ちを犯してはならないということを、知識としてではなく、生徒自らに実感してほしいと考えた。以下は実践の学習指導案である。

① 評価規準表

| 関心・意欲・態度 | 思考・判断・表現 | 技能 | 知識・理解 |
|--|---|--|--|
| 人類が引き起こした戦争による惨禍や国際協調と国際平和の大切さについて、関心を持って意欲的に追及している。 | 各国が戦争を決断した背景を、当時の国際情勢をふまえながら多面的・多角的に考察し、そのことを適切に表現している。 | 各国が戦争を決断するまでの経過を史料や年表などの資料を活用し、読み取ったりまとめたりにしている。 | 第二次世界大戦までの経過や大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解している。 |

② 本時の目標

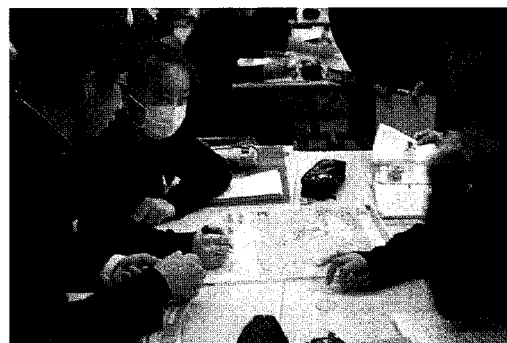
- ・ 当時の国際情勢や国内の状況に留意しながら、仲間との対話を通して日本が戦争を決断した背景について多面的・多角的に考察し、そのことを適切に表現している。
(思考・判断・表現)
- ・ 諸資料から課題に適した情報を選択し、効果的に活用したり、読み取ったりまとめたりしている。(技能)

③本時の展開

| 学習過程 | 学習活動および内容 | 指導上の留意点 | 評価の観点 |
|--------------|--|---|--|
| 導入 (コの字) | ○数字から太平洋戦争を読み解く。 ・航空機生産数、自動車生産数、主要艦船保有数など | ○日本とアメリカの国力の差を意識させる。 | |
| 展開1 (4人班) | 【課題1】当時（世界恐慌～真珠湾攻撃）の国際情勢を整理しよう。 | | |
| | ○今までの学習した内容をもとに、当時の国際情勢を整理する。 | ○3つの考える視点を提示する。 「国々のつながり（○・赤）」 「力関係（△・青）」 「国内の状況（□・緑）」 また、それぞれを記号と色で区別させる。 | ○既習事項をふまえながら思考できているか。（思考・判断・表現） |
| 展開2 (4人班) | 【課題2】日本はアメリカに勝てると考えていたのか。 | | |
| | ○日本がアメリカなどと戦争を始めた理由をおさえる。 ・勝てるとは考えていないが、自国自衛のために仕方なく。 ・欧州のドイツ次第で勝てた。 ・軍部の暴走だった。 | ○日米の国力・戦力比較表などの資料をもとに考えさせる。 ○根拠を明確にさせる。 ○導入の数字にも留意させる。 ○単なる勝敗を考えさせるのではなく、日本が戦争に至るまでの経緯を思考させるようにする。 | ○有用な情報を適切に選択し、読み取れているか。（技能） ○日米だけではなく、世界各国の状況もふまえて、考察しているか。（思考・判断・表現） |
| まとめ (コの字) | ○戦場からの手紙を読む。 | ○次回以降の授業とのつながりを意識させる。 | |

(4) 成果と課題

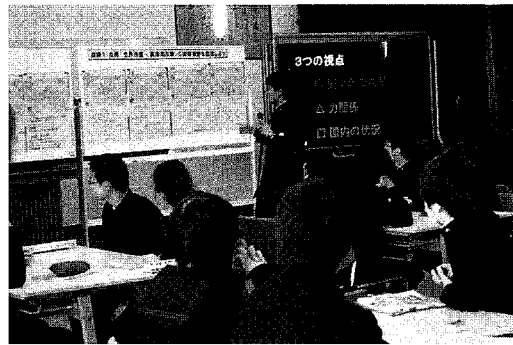
この授業では、【課題1】において、考える視点を明示する「焦点化」、思考した内容をボードにみえる形で記す「視覚化」、思考した内容を全体で共有する「共有化」というユニバーサルデザインの考えを取り入れた。このことにより、生徒はこれまでの学習内容の整理を比較的短時間で行えるだけでなく、全体でほぼ同じ水準の知識を獲得することができた。そのうえで、【課題2】に取



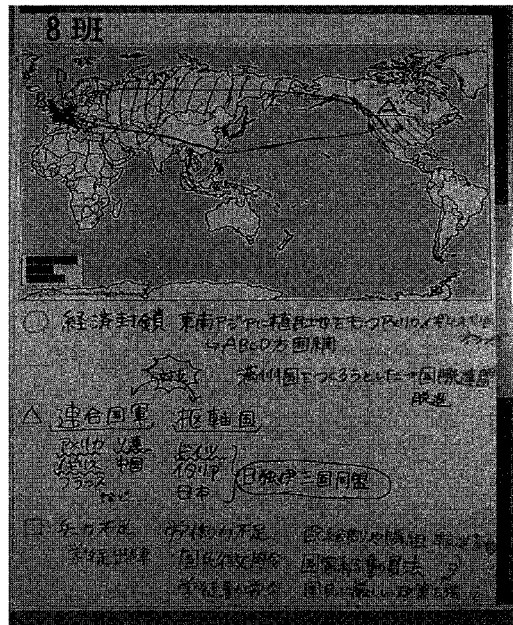
↑4人班で話し合う様子

り組むことで、より難しい課題に脱落者を出すことなく、全員で協力して取り組もうとする姿勢を持たせることができた。また、結果として、生徒は仲間と協力して思考を練り上げ、共有する中で自分だけではなかなか気づかない点も踏まえて、新たな自分の考えを形成することができていた。

ただ、「日本はアメリカに勝てると考えていたのか。」という発問の仕方は、「日本」や「アメリカ」という表現があいまいで、それらが国民を指しているのか、政府や首相などを指しているのかわかりにくく、結果、視点が定まらず、全体でより深く思考するには至らなかった。また、50分の授業の中に学習内容を盛り込みすぎたために、生徒が思考したボードを十分に活用しきれなかった。本来ならば、2時間構成で行う方がより高い学びが得られたと考える。さらに、ワークシートにおいても、評価の観点から、生徒の思考の変遷がより分かるよう工夫していく必要がある。



↑ボードを使って全体共有の様子



思考した内容を班でまとめたボード→

↓ワークシート

歴史プリント

アジア・太平洋での戦争 (P.230 ~ P.231)

課題1: 当時(世界恐慌~真珠湾攻撃)の国際情勢を整理しよう
[○ 国々のつながり(赤色)]

メモ
① 日本 ドイツ、イギリスと日独伊三国同盟を結んだ。→ アジア、太平洋の覇権を握る。
② 独逸、イギリス 自国と植民地の関係を強めて、(その植民地をめぐって) 互いの貿易を妨害する。
③ 日本 関東軍が滿洲国(偽滿洲国)を占領し、1932年2月に滿洲国を建国。
(1933年国際聯盟を脱退)

[△ 力関係(青色)]

メモ
ドイツ、イギリス、フランスは同盟を結んだ。
アメリカはソ連と同盟した?
ドイツは降参してフランスを占領。
↓
日本は独逸と同盟してフランスを降参した?

[□ 国内の状況(緑色)]

メモ
本家の情報から国民に知らせられた。
国民不安で戦争に参戦した。
生活物資が不足した。(食糧配給)
原爆投下された。大々的報道

課題2: 日本はアメリカに勝てると考えていたのか

4人グループ 根拠となる資料 (EFG)

日本の資源は必争地として、アジアの真珠湾を攻撃して、そこを奪った場所を引いて、東南アジアとイギリスの資源を奪取する。
資源の差が明らかで、アメリカは勝てると思っていた。
戦力にもかなりの差があった。

全体での交流

メモ
軍費が多い → 勝てると思っていた。
資料 EFGより → 資源の差が明らか。
勝てる...

最終的な私の考え(勝てる・勝てない) 根拠となる資料 (E・F)

・アメリカと日本の国力・戦力の格差で日本開戦に反対していた人はいらぬと思う。でも、もし勝つとすれば、真珠湾を攻撃して早期講和に持ちこたえていたと思う。戦力も日本優位の状態で講和を打ち、日本に有利な条件を有利と考えていたと思う。しかし、真珠湾攻撃に成功し、その後、東南アジアを完全に占領していた日本は自国の力を過信して、戦争を続けたと思う。
日本が本気で宣言をすれば受諾しなかったのは、ソ連も同盟を結ぶしかなかった希望や、降参はできないという軍のプライドが原因だと思う。また、この時日本は持ち金が少なかったから、少し攻勢を仕掛けて本気で宣言を交際すれば、日本の軍に余力がなかったと見られていたと考えていたのかもしれない。

課題2：日本はアメリカに勝てると考えていたのか

4人グループ < 勝てると考えていた > 根拠となる資料 (E, C)

ABCD
包囲網

- ・ Eより、開戦時の軍力は日本が優れていたといえる。ただ、生産力をはじめとする国々はアメリカの方が優っていたので、日本側は「長期戦になれば「厳しいが」、短期戦なら勝てる」と思っていたのではないかと。
- ・ Cより、日本は他国より前から準備していたし、真珠湾攻撃で先手をとったので、優位に立っていると見ていた。(軍事費の大量投入)
- ・ ファシズムの独逸、伊と同盟を結んでいたし、ソ連とも中立条約を結んでいたため、安心感があった。

全体での交流

- < メも思っていなかった >
- ・ E, F, Gより、資源でかちている。
- < 思っていた >
- ・ 軍事への投資が多い。

最終的な私の考え (勝てる ・ 勝てない) 根拠となる資料 (E, F, G, C)

日本は資源などの面において、アメリカよりも劣っていたといえる (E, F, G)。
 ABCD包囲網もあったため、日本は長期にわたって戦えるような持久力がないことは明らか。だが、軍事面では、例えば、軍事費の投資や、軍力自体はアメリカよりも優れている点が多数あったし、その技術力(質)も高い水準にあったと思う。その例としてあげられるのが零式艦上戦闘機だ。ゼロ戦は、当時最高といわれるほどで、また、優れた戦闘機も多く持っていたので、日本は技術的に自信があったと思う。これらのことから、僕の最終的な考えは、「日本は長期戦にまつれぬは「勝算は低い」が、短期決戦ならば「アメリカに勝てる」と思っていたのだと思う。

↑ワークシート

【実践事例2】

(1) 題材

「第二次世界大戦と日本～知の認識・構造化を目指して～」

(2) 単元の目標

軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解させる。

(3) 内容

平成20年の中学校学習指導要領の改訂において、現代社会についての理解を深めるために「近現代史の学習」が重視された。その特徴としては、「歴史事象の特色についての考察」「事象間の関連性やつながりへの着目」が挙げられる。これは、歴史学習における思考力、表現力の育成をめざしたものであるといえる。

そこで、本時では世界の動きと我が国との関連に着目して取り扱うとともに、国際協調と国際平和の実現に努める重要性を気付かせることに意識した。具体的には、多くの映像や資料から戦争の惨禍を実感させ、そこから戦争に対する価値観を構築させること(知の認識へ向けた指導)と、考察の過程において世界の動きと我が国との関連性や戦後世界とのつながりを意識させること(知の構造化に向けた指導)の2点である。以下はその学習指導案である。

①単元の評価規準

| 社会的事象への 関心・意欲・態度 | 社会的な 思考・判断・表現 | 資料活用の技能 | 社会的事象についての 知識・理解 |
|--|---|--|---|
| 昭和初期から第二次世界大戦終結までの日本の歴史のあらましと世界の動きに対する関心を高め、意欲的に追求しようとし、二度の世界大戦期の特色をとらえようとするとともに、国際協調と国際平和の実現の大切さを考えようとしている。 | 昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係、欧米諸国の動き、戦時下の国民の生活などについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。 | 昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係、欧米諸国の動き、戦時下の国民の生活などに関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。 | 軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解し、その知識を身に付けている。 |

②指導計画（全5時間）

| | | |
|-----|-------------------|----------|
| 第1次 | 第二次世界大戦の始まり | …1時間 |
| 第2次 | アジア・太平洋での戦争 | …1時間 |
| 第3次 | 戦時下の国民の生活 | …1時間 |
| 第4次 | 平和へのあゆみと戦争の傷あと | …1時間（本時） |
| 第5次 | 戦争に着目して、時代の特色にせまる | …1時間 |

③本時の目標

- ・人類全体に大きな惨禍を及ぼした第二次世界大戦までの経過を理解することができる。
（社会的事象についての知識・理解）
- ・ポツダム宣言の受諾が遅れた理由を、世界の国の動きや国体護持と関連して説明することができる。（社会的な思考・判断・表現）

④本時の展開

| | 学習活動および内容 | 指導上の留意点 | 評価の観点 |
|----|--|---|-------|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・戦争に対する考えを発表する。 ・戦争の終結の映像を見る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・価値観の否定に陥らないように留意する。 ・視聴覚教材を用いて時間をかけず確認する。 | |

| | | | |
|----------------------|---|--|--|
| <p>展 開</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・イタリアとドイツが降伏に至ったことを確認する。 ・広島と長崎に原子爆弾が投下されたことを確認する。 ・日本が降伏したことを確認する。 ・玉音放送を聞く <p>第二次世界大戦は、どのようにして 終結したのだろうか。</p> <p>〈予想される反応〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドイツが敗戦したのを契機として日本が敗戦し、終結した。 ・国際協調が崩れ、一般市民の犠牲者が多数にのぼって終結していった。 <p>日本は、なぜポツダム宣言をすぐに 受諾しなかったのだろうか。</p> <p>〈予想される反応〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・負けを認めたくなかった。 ・軍が劣勢を認めたくなかった。 ・天皇制を存続させたかった。 ・ソ連の対日参戦を知らなかった。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「ヤルタ会談」の内容をおさえておく。 ・「ソ連の対日参戦」「ポツダム宣言」の内容をおさえておく。 <p>既習事項とつなげて記入させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まとめ方や表現の違いにも着目させる。 ・机間指導をおこない、考えのまとまらない生徒に時系列でまとめよう指示しつつも、よくまとめられている生徒を見付けておく。 ・諸資料に基づいて思考するように促す。 ・我が国の政治や外交の動きと世界の動きとの関連性、既習事項や戦後世界とのつながりにも意識させる。 ・机間指導をおこない、考えのまとまらない生徒には、教科書の該当箇所から考えさせる。 | <p>人類全体に大きな惨禍を及ぼした第二次世界大戦までの経過を理解することができる。</p> <p>(社会的事象についての知識・理解)</p> <p>ポツダム宣言の受諾が遅れた理由を、世界の国の動きや国体護持と関連して説明することができる。</p> <p>(社会的な思考・判断・表現)</p> |
| <p>ま と め</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・その後の日本のようすについて想像し、日本国憲法第一条、九条の内容を確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「民主化」「天皇」「戦争放棄」をキーワードとして、既習事項や次の学習以降につながりを持たせる。 | |

(4) 成果と課題

授業後の生徒のワークシートから、戦争のおそろしさや戦争に対する自己の考えが客観的に述べられていたことから、一定の「知の認識」が得られたことがわかった。それには、導入でのICT機器の使用が有効であったことが一因であると考えられる。実際、戦争の終結における映像での衝撃(残酷なシーン等はカットしてある)や青空教室や墨塗り教科書、大政翼賛会などの映像シーンと結び付けて価値観を築いていた生徒が複数名見られた。よって、知の認識のためにはICT機器の活用は一定の効果が認められると考えられる。

また、仲間との対話や議論を通して自らの思考や判断を再構築していく中で、思考力の向上も見られた。「日本は、なぜポツダム宣言をすぐに受諾しなかったのだろうか」という発問に対し、多

くのグループが日本の国体護持やソ連参戦を考えていなかったことなどの原因について思考していたことから、「原因と結果の関係で推理する思考力」の向上が確認できた。さらに、我が国の政治や外交の動き、世界の国々の動きとも関連付けていたグループも多く見られ、本時の目標のある程度の達成が見られた。

一方で、課題としては、知の構造化に至るための時間の確保、課題の精選があげられる。「どのようにして第二次世界大戦は終結したのだろうか」という発問に対し、様々な資料から得た情報やそれまで獲得してきた知識を整理していることが読み取れたワークシートはそれほど多くなかった。したがって、「どのようにして」といった HOW で問う課題には時間がかかるため、その点を考慮しておくか、「整理しよう」といった文言で生徒が課題に取り組みやすいように設定していく必要があると考えられる。

【実践事例3】

(1) 題材

「江戸期の文化を知ろう」 ～落語へのアプローチ～

(2) 目標

江戸時代の文化の特色や代表的な作品などを理解し、当時の生活様式や文化などに興味を持ち、自分が発見したことやさらに探求してみたいことを効果的に表現できる。

(3) 学習内容

本学では芸術鑑賞会で落語を取り上げた。世界でもあまり類を見ない、話者が一人で様々な役を演じて笑いを取るそのスタイルに触れ、生徒たちは楽しみながらも興味を持ったようであった。折しも、授業では落語が大きく発展した江戸期の文化について学習する予定であった。文化史の学習は歴史学習において非常に重要であると考えられる。理由はその時代に生きた人々の営みや、思考、さらには他国とのつながりや経済活動など、文字史料だけではうかがい知ることのできない内容が多く含まれているからである。しかし、ややもすると文化史の学習は教科書に書いてあることをなぞって終わり、としてしまうパターンがよく見られるのも事実である。講義形式に終始する授業では生徒たちの関心や意欲を育てることができず、学習効果も期待できない。よって今回は絵画、彫刻、音楽や演劇などに実際触れて、その時代を生きた人々に思いを馳せ、そこから時代の大観をすることが授業中にできないか。そう考えて今学習を立案した。

全二時の本授業では、まず江戸時代の文化の特徴を浮世絵の一種である『鯰絵』『判じ絵』を利用して「文化の担い手が豊かになった町人であること」を生徒たちの思考から導きださせた。次に町人たちが支配者層である武士をも上回る勢いを見せ始めたこの時代が鮮やかに描写されている落語を手がかりに、各自で江戸期の庶民生活について深く探求してみたいポイントを設定させ、レポート形式で発表させた。以下はその指導案である。

単元の評価規準表

| 関心・意欲・態度 | 思考・判断・表現 | 技能 | 知識・理解 |
|------------------------------------|--|--|-------------------------------|
| 江戸時代の文化や生活に興味を持ち、自ら積極的に探求活動を行っている。 | 提示された資料や自らが調査した資料を基に、因果関係や論の根拠を明らかにして考察することができる。 | 文章や写真などから当時の文化を象徴する事物、時代背景などを読み取ることができる。 | 江戸時代の文化に対して、代表的な作品や人物を理解している。 |

第一時

①本時の目標

- ・浮世絵から江戸時代の文化について考察し、過去の文化との相違点や特徴などをまとめることができる。(思考・判断・表現)
- ・諸資料から課題に適した情報を選択し、効果的に活用したり、読み取ったりまとめたりしている。(技能)

②本時の展開

| 学習過程 | 学習活動および内容 | 指導上の留意点 | 評価の観点 |
|-----------------|---|---|--|
| 導入 展開 まとめ | <p>◎パワーポイントで教材提示(鯰絵〈図①〉、判じ絵〈図②〉)</p> <p>「これは、何を表した絵なのだろうか」</p> <p>→教材を提示、考察させる</p> <p>→個人でのまとめ(一斉形式)</p> <p>→班でのまとめ(4人班)</p> <p>→発表</p> <p>◎「では、この時代の文化は今までに学習した文化に比べてどのような特徴を持つのだろうか」</p> <p>→過去学習した文化を代表する写真を提示 (東大寺大仏、寝殿造、姫路城)</p> <p>→班での思考(4人班)</p> <p>→発表</p> <p>◎ワークシートの穴埋めを協力して完成させる →正答の発表</p> | <p>○社会風刺や戒めが描かれたものであることに気づかせる</p> <p>→鯰はある自然現象に…</p> <p>→この金を吐き出している人々は…</p> <p>○抽象論にならぬようにする</p> <p>○前時までに学習した新田開発や農商業の発展にも関連があることを気づかせる</p> | <p>☆描かれた事物を読み解いた上で、この時代の文化を理解する上で必要なキーワードを見つけ出しているか (技能)</p> <p>☆過去に学習した内容と対比の上で江戸時代の文化の特徴を表現できているか (思考・判断・表現)</p> |



図 ①



図 ②

第二時

①本時の目標

- ・文章化された落語の中から当時の文化や生活がうかがえる部分を選び出し、意欲的に調べ学習を行うことができる。(関心・意欲・態度)
- ・自らの疑問点を解消するために収集した資料を活用し、調査内容をまとめることができる。(技能)

②本時の展開

| 学習過程 | 学習活動および内容 | 指導上の留意点 | 評価の観点 |
|----------|--|--------------------------------------|---|
| 導入 展開 | ◎資料『千両みかん』『鹿政談』『井戸の茶碗』から一つを選び、読む。 | | |
| まとめ | ◎通読後、さらに深めて知りたい部分を決めて、各自で調べてレポートにまとめる。 →iPad、図書室を使用 | ○意味の分からない言葉や言い回しをピックアップさせ、そちらも調べさせる。 | ☆疑問点や探求してみたいポイントを積極的に拾い出せているか、また、それを深く掘り下げて調べられているか。 (関心・意欲・態度) ☆自らが疑問に思う点を読み手に伝わりやすい形でまとめることができているか。(技能) |

(4) 成果と課題

課題設定の際に定義した、講義形式のみに終始しない、文化の実際に触れて学ぶ文化史の授業、という点はおおむね達成できたかと思う(図③～⑥)。芸術鑑賞会とこの授業の間がそう空いていないこともあり、生徒たちの落語に対する興味関心が高い状態で実践を迎えられたことも、今授業にとってよい影響であった。授業を始めるにあたり懸念していた、「絵の寓意を読み取ることが難しい」や「落語を最後まで読み通すことが難しい」というような点も、多くの生徒がクリアしていたように思う。今回のように文化や時代の特性を大まかにつかむ→その時代の特徴をさらに掘り下げる、といった手法は今後の授業においても積極的に取り入れていきたい手法である。そのためには生徒たちに提示する教材が『魅力的』である必要がある。今後も教材の研究を積極的に行っていきたい。

課題としてまず挙げられるのは、生徒たちに出した指示が曖昧であったことである。「興味を持ったところを調べてみよう」と生徒たちには投げかけたが、これにより落語のオチについて真剣に考察する者(例:『鹿政談』において奉行の采配で無罪となった豆腐屋の主人を帰す際に交わされる会話である、「キラズにやるぞ」「へえ、マメで帰ります」)や、単純なことを調査してしまった生徒がクラスに数人いた(図⑦)。こちらとしては各落語が描写する当時の民衆がいきいきと活動する様子、それに注目・調査してほしいのだが、こちらの言葉が足らずにこのような結果となってしまった。調べ学習や班活動など、生徒主体の学習をする際に留意すべきは、的確な指示を出して生徒たちの学習をこちらの意図する目標にまで誘導することである。自由な意見交流や探求活動は確かに有意義ではあるが、限られた時間数で学力をつけさせるためには、前述のような指示が必要不可欠である。当たり前のことではあるが、今回はそれを思い知らされた。また、時間の都合上断念せざるを得なかったが、各自の調べた内容をプレゼンテーションするような活動も考えられる。根拠があって立脚した持論を効果的に聞き手に伝えることは、社会科の目指す大きな目標の一つである。さまざまな表現活動ができるよう、これからも工夫を続けていきたい。

【実践事例4】

(1) 題材

「ディベートをしよう！」 ～ 討論道場 ～

(2) 目標

現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

(3) 学習内容

テーマ「日本は安楽死を認めるべきである」

「防犯カメラを街中に設置するべきである」

「奈良県の若草山にモノレールを敷設するべきである」

| | 安楽死 | | 防犯カメラ | | 若草山 | |
|----|-----|----|-------|----|-----|----|
| | 賛成 | 反対 | 賛成 | 反対 | 賛成 | 反対 |
| A組 | 5班 | 2班 | 6班 | 4班 | 1班 | 3班 |
| B組 | 6班 | 1班 | 4班 | 5班 | 3班 | 2班 |
| C組 | 2班 | 6班 | 5班 | 4班 | 1班 | 3班 |
| D組 | 4班 | 3班 | 1班 | 2班 | 5班 | 6班 |

(表 1)

クラスごとの対戦表と勝敗結果

(勝利班は○)

※C組 防犯カメラは引き分け

(第3学年 2学期実施)

テーマ「日本はカジノを認めるべきである」

「日本は救急車の利用を有料化すべきである」

「日本は捕鯨を禁止すべきである」

| | カジノ | | 救急車の有料 | | 捕鯨禁止 | |
|----|-----|----|--------|----|------|----|
| | 賛成 | 反対 | 賛成 | 反対 | 賛成 | 反対 |
| A組 | 4班 | 2班 | 3班 | 1班 | 5班 | 6班 |
| B組 | 5班 | 3班 | 4班 | 1班 | 2班 | 6班 |
| C組 | 5班 | 4班 | 2班 | 1班 | 6班 | 3班 |
| D組 | 3班 | 6班 | 4班 | 2班 | 5班 | 1班 |

(表 2)

クラスごとの対戦表と勝敗結果

(勝利班は○)

(第3学年 3学期実施)

クラスごとに3つのテーマを設定し、賛成・反対の6つの班(班は6~7人で構成)で分けた(表1, 2)。各班はそれぞれ授業時間や放課後などを利用して、インターネットや書籍などを使い、情報収集や作戦を立て、ディベートにのぞんだ。

ディベート後、ディベートをした班以外の生徒に、自分自身が持っている意見ではなく、「どちらの主張のほうにより説得力があったか」という基準で判定をさせた。具体的な評価基準を事前に提示し、生徒自身の意見や価値観で判定しないよう配慮した。

また、生徒はこれまでの授業の中で、議論において「主張」「根拠」「理由づけ」が重要で、「根拠」は「意見」ではなく「事実」を挙げることが大切であるということは学習している。その既習事項を実践練習することで、「知っている」から「使える」へとつなげたいと考えた。

(4) 成果と課題

限られた時間の中で、テーマに関連する多くの諸資料を集め、その中から自分たちの主張の根拠となる資料を取捨選択することができており、これまでの学習の成果をみることができた。また、今回は自分自身の体験などをふまえ、主観的な意見を根拠としてしまいがちなテーマ設定もあったが、しっかりと客観的な事実理由づけを行っており、説得力をもって論を展開することができていた。なかには、事前に相手の主張の根拠を推察し、その根拠を打破する別の資料を準備する班もみられた。

以前行ったディベートや普段の授業の経験を生かし、論理展開や話し方は上達したが、デー

タの提示の仕方など視覚的に相手に訴えるという技術はまだ上達の余地がある。これらの技術の向上のために、事前にプレゼンテーションの授業を行うなどしたが、いざディベートがはじまると生徒は話すことに集中してしまいがちで、プレゼンの経験を生かすには至らなかった。今後は、プレゼンの機会も増やすことで、視覚的効果を「知っている」が「使える」になるようにしていきたい。

ディベートのテーマ「日本は捕鯨を禁止すべきである。」

| | 賛成側 (5) 班青 | 反対側 (6) 班黄 |
|-----|---|--|
| 立論 | 国際司法(裁) → 禁止 魚の食文化く鯨の保護 捕鯨 → イルリも含まれる | 持続的に 個体数の少ないものは保護 魚の調査 古くからの鯨文化 一定数範囲内 |
| 反論 | 魚 → デリケート 舌し獲の影響が強い 調査の言わよ性 ↓ 合理性が低いと世界に言われている 商業的かつ目的ではないか | 胃の中を調べて絶滅をまぬがれる オーストラリアのカンガルーは禁止されて いるのに... 水族館にいるのはほんの少し捕らえたもの イルリだけめばいい 反捕鯨国が捕鯨国より少ない |
| まとめ | シーシェパードX 2013年オーストラリア → 日本 環境保護のイメージが強い 勝つのも負けるのも国際的印象が悪い 文化だけにするのはおかしい | 魚肉 → 健康にも良い 海洋国なのでお米とは違う 食文化が崩れる 鯨だけを保護するのは環境が崩れる |

ディベートのテーマ「日本はカジノを認めるべきである。」

| | 賛成側 (5) 班 | 反対側 (3) 班 |
|-----|--|---|
| 立論 | 経済効果が見られる。国内に 福祉が高齢化 4兆 ~ 15 億 税収の増進 アジアの富裕層 1兆円 20% 60% | 金銭を貯えている Fラング 損 → 依存症 2% 10% 精神の病 治療費 = 犯罪者 4兆円 (韓国) 観光客が 増える 27兆円 → カジノの数倍 日本はギャンブル禁止 → 借金で景気が悪化 今年も国で通す → 挽回 |
| 反論 | マカオ 2006年 ↑ 依存症 → X 国の機関 自身の要因 { 多量に遊べる シンボル 社会の理想 ↓ 犯罪発生率 の閉鎖 ↓ 北極圏を突破 → 世界的な悪化 | 10兆円 27兆円 世界は生財 赤字 |
| まとめ | 青年層の対策 (学校で授業) 経済効果 観光客の増加 → 観光業の発展 Fラング 観光業の発展 Fラングの利益 = 国の利益 15 | (依存症者) 増える → 日本のGDPを27% X 観光業の発展 |

↑ディベートのワークシート

＜感想＞

今回のディベートでは、事前に沢山の情報を集めて、きちんと相手に伝えるように構成や流れを考えました。また、自分たちの意見だけでなく、相手が言うと考えられる意見も予想しておき、反論も考えてスムーズに議論を進めることができました。立論を読むときには、相手に伝わりやすいようにクリアな声で速速に身をつけることができました。

【実践事例5】

(1) 題材

「よりよい社会を目指して」～知の認識・構造化・活用を通して～

(2) 目標

自らの生活を見直すとともに、現在および将来の人類がより良い社会を築いていくために解決すべきこととして、課題を考え続けていく態度を育てる。

(3) 学習内容

知の獲得のためには、認識・構造化・活用は必須である。そこで本単元では、単元計画をこれら3つの段階に分類した。なお、この単元は中学校社会科における最終単元にあたるため、単なる調べ学習に陥ることのないよう、目標の達成に向けて「言語活動の充実」「地理的分野と歴史的分野との関連」「国際協調」にも留意して授業を進めた。

①国際社会と世界平和（4時間）：知の認識の段階

教科書に掲載されている資料と写真を結び付けて世界の現状を実感させたいので【図1】、国家成立の要件、EUなどの地域主義のあゆみ、国際連合の諸機関とそのしくみ、テロや紛争などの新しい戦争、軍縮の現状について確認した。その際、「日本は常任理事国となるべきか」「軍縮を進めるためにはどうすればよいか」という課題を提示し、共同的な学びの手法で諸資料をもとに思考させていくことで、国家間相互の主権の尊重と協力、世界の国々の相互理解と協力、国際連合をはじめとする国際機構の役割が大切であるということの認識を図った。

【図1】「結び付けた資料と写真の題名」※東京書籍「新しい社会 公民」より作成

| | | | |
|-----|----------------------|-----|---------------------------|
| 資料1 | 各国の一人当たり 二酸化炭素排出量 | 写真1 | 難民キャンプで食料を求めて 列をつくる人たち |
| 資料2 | 各国の難民発生数 | 写真2 | 貧困地域の子どもたち |
| 資料3 | おもな国の国内総生産 | 写真3 | 地球温暖化により後退する氷河 |

②国際問題とわたしたち（4時間）：知の構造化の段階

社会科の集大成と位置づけて、4人グループによる探究活動に入った。具体的には、5つのテーマを提示し【図2】、合計10あるグループを1つのテーマにつき2つのグループに割り振った。そして、そのテーマから2つのグループで協同して問題点を見出させ、グループ内でリンクマップ（関連図）の作成、資料収集の役割分担にあたらせた。ここでは、知の認識によって得た断片的な知識を分析していくことを通して、諸課題に対する解釈を見出させることに意識した。

その後、提示した視点【図3】をもとに問題点の解決策となるプランを2つ考えさせた。その際、試案の段階から提出させ、安易な発想や現実味のない考え方など、思考した内容が不十分であれば再考させることで、論理的な思考へつなげることに留意した。最後に、レジュメ1枚（発表の際全員に配布する）と画用紙2枚（もっとも効果的と思うタイミングで使用する）を作成させた。なお、レジュメの作成に当たっては、資料を1つ以上作成することを義務付けることで、資料活用の技能の育成を図った。【図4】

【図2】「提示したテーマとキーワード」

| | テーマ | キーワード |
|---|------------|----------|
| ① | 文化の多様性 | 文化 |
| ② | 地球環境問題 | 環境 |
| ③ | 資源・エネルギー問題 | 資源・エネルギー |
| ④ | 貧困問題の現状 | 貧困 |
| ⑤ | 世界の中の日本 | 戦争 |

【図3】「プランを考えるための

4つの視点」

| | |
|---------|-------|
| 日本と世界 | 対立と合意 |
| 持続可能な社会 | 効率と公正 |

【図4】作成した生徒のレジュメ

エネルギーの確保と、環境への配慮をどう両立するか??

プランA 原子力発電を主流にする。

① **メリット** 原材料のウランは準国産で、国内での自給性が高い。
② **デメリット** 発電時にCO₂を排出しない。
→ エネルギー保護と環境への配慮を両立できる。

③ **メリット** ・発電コストが安い
・既存の発電所が使えるので稼働させやすい

④ **デメリット** ・都市部に作れない。
・住民の反対 [リスク]
・高濃度放射性廃棄物の処理

プランB バイオマス発電、廃棄物による発電に主流にする。

① **メリット** 廃棄物や、採掘副産物が原料なので、自給性が高い。
② **デメリット** どちらか廃棄物となるものからエネルギーをとり出すので効率が悪い。
→ エネルギー保護と環境への配慮を両立できる。

③ **メリット** ・技術として成熟して、実用化している。
・廃却施設の多い日本に適している。

④ **デメリット** ・発電時にダイオキシンが発生する。
・発電効率が悪く、ごみの分別が難しい。

資料1. ドイツの新エネルギーの発電割合

| | |
|-----------|-------|
| バイオマス | 6.7% |
| 再生可能エネルギー | 20.6% |

→ 実用化が進んでいる

③ 資源・エネルギー問題

《問題点》エネルギーの確保と環境への配慮をどう両立するか。
《原因》・化石燃料などの資源は、埋蔵量に地域的なばらばらあり、可採年数も限られている。
・世界のエネルギーの多くを先進工業国が消費している、発展途上国の需要が対抗される。

《プランA》先進工業国の身の周りのエネルギー消費を減らす

- ・電気のエネルギー ① 家でエネルギー変換効率を40%から60%に向上させる
- ② LED照明を40%に使用し、省エネ照明にする
- ・車の消費エネルギーを減らす ③ 少ない燃料で長距離を走る。
- ④ ガソリンエンジンが少なくなる
- ・家庭の消費エネルギーを減らす ⑤ LED電球にかえるだけで、省エネ効果が高い。(省エネ)。
- 家庭のエネルギー消費量の約36%を照明が占めている。
- ⑥ 全ての家庭が買いかけておくとおぼつかない。

《プランB》新しいエネルギーを活用する。

- ・分散型エネルギー (個々の家や地域の単位で、自分たちで電気を熱エネルギーに変換・管理するシステムのこと)
- ① CO₂の排出量が少なくなる(新エネルギーを利用するから)
- ・大規模な設備はいらない。
- ・エネルギーの有効利用や環境への配慮にエネルギー効率率が約80%
- ② コストが高い
- ・釜中型(お湯お水)に比べて発電効率が低い

③国際問題とわたしたち（2時間）：知の活用

探究した内容の発表に入った。1つのテーマについて、比較・分類・関連・批判などのより深い考察を可能にするため、同じテーマのグループを続けて発表させた。発表をしない生徒には、単に発表を聞くだけという状況をなくすために、評価を行わせつつ、「どちらのプランが良いか」「そう考えた理由」について記述させた。【図5】また、2グループの発表ごとにコの字での協議の時間を設け、学級全体でプランについて交流した。交流にあたっては、「対立と合意」「効率と公正」の見方や考え方、持続可能な社会の実現可能性に着目して検討するように留意した。

最後に、人間の安全保障や地球市民としての立場、社会参画について確認することで、「自らの生活を見直すとともに、これらの課題を考え続けていく態度」、つまり、知を実感し、実生活・実社会へ還元していく「知の活用」を図った。

【図5】「生徒の評価シート」

| テーマ：③資源・エネルギー問題（教科書 P166～167） | | |
|---|-----------------------|--|
| (2)班 | ①～⑥をそれぞれ3点満点で評価 | (9)班 |
| 3 | ①プランが効率的で、公正である。 | 2 |
| 2 | ②プランが持続可能な社会の形成につながる。 | 3 |
| 3 | ③メリットやデメリットに根拠がある。 | 3 |
| 3 | ④レジュメにまとまりがある。 | 3 |
| 3 | ⑤互いに協力している。 | 3 |
| 14 | 合計点 (15点満点) | 14 |
| 同意するプラン (A・B) | | 同意するプラン (A・B) |
| 理由： 原子力はCO ₂ は出ないけれど、過去に事故もあっていて、いろいろなものを再利用するという効率的なBの方がいいと思います。 | | 理由： 先進国は世界のエネルギーのほとんどを消費しているのに、むだに奪っているものが多いのを、それを減らして行くことで持続可能な社会につながると思います。 |

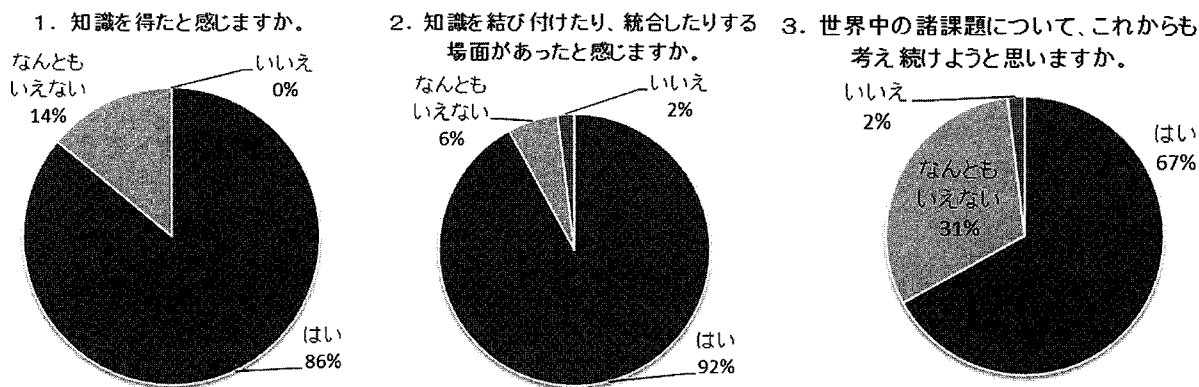
| テーマ：③資源・エネルギー問題（教科書 P166～167） | | |
|--|-----------------------|--|
| (2)班 | ①～⑥をそれぞれ3点満点で評価 | (9)班 |
| 3 | ①プランが効率的で、公正である。 | 3 |
| 3 | ②プランが持続可能な社会の形成につながる。 | 3 |
| 3 | ③メリットやデメリットに根拠がある。 | 2 |
| 3 | ④レジュメにまとまりがある。 | 3 |
| 2 | ⑤互いに協力している。 | 3 |
| 14 | 合計点 (15点満点) | 14 |
| 同意するプラン (A・B) | | 同意するプラン (A・B) |
| 理由： 原子力は地球にやさしい。そして日本ではまだ使っていない。時間がかかるとは思う。Bは環境保護へのメリットが大きい。原子力に頼るべきだ。BはCO ₂ 削減に効果的。メリットが大きいと思う。 | | 理由： 新エネルギーの利用は今後伸びる。世界中で使われている。実現への道は、しっかりしていると思う。BはCO ₂ 削減に効果的。メリットが大きいと思う。 |

(4) 成果と課題

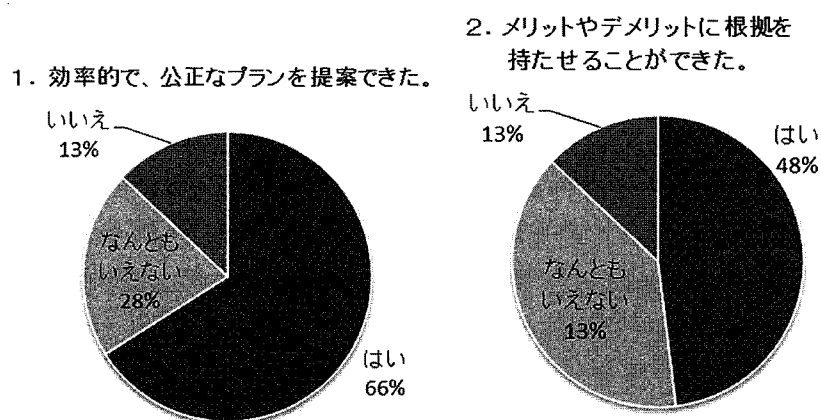
生徒の評価シート【図5】からは、対立と合意、効率と公正の視点から多面的・多角的に考察し、判断していることがうかがえた。また、授業後に行ったアンケート【図6】で、知識を得たという感覚や、その知識を結び付けたり統合したりする感覚があることから、生徒の中である程度の知の認識や知の構造化が行われたことがわかった。しかし、その一方で世界中の諸課題について考え続けようとする意識の高まりはあまり見られず、知の活用については授業構成が不十分であったことがわかった。さらに、自己評価の結果【図7】から、満足のいくプランを十分に練り上げられていないことがわかった。

このことから、より満足のいくプランを練り上げさせるために、知の構造化の段階で十分にプランを練り上げるための「時間数の確保」と、より深い思考を築き上げるための「指導」が重要となることが判明した。また、知の活用においては、諸課題について考え続けていく態度を養うために、発表の時間での工夫について考え直す必要性を実感した。実際、どのプランに同意するか的人数把握に時間がかかり、交流の時間確保を図ることができなかったのが要因であると考えられる。そのため、ICT機器を活用して人数把握の時間短縮を図ったり、人数把握を評価シートの回収後に回して、同意する理由について述べる時間を確保したりするなどの対策が必要である。

【図6】「アンケートの結果（161人に実施）」



【図7】「自己評価の結果（161人に実施）」



3. 成果と課題

成果として、新聞を活用し、「協同的な学び」の手法を取り入れることで、生徒が社会に興味・関心を持ち、自ら積極的に情報へ迫る姿勢がこれまで以上に認められた。また他者の意見や考え方に触れることで自分の考えを再構築し、新たな価値観を形成していく姿が伺えた。

今後も引き続き、中学校における3年間の「つながり、かさなり、ひろがる授業」だけでなく、小中高の12年間を見通した「つながり、かさなり、ひろがる授業」をより一層深めていかななくてはならない。また、来年度は研究テーマが「評価」である。生徒にとってわかりやすい評価をめざしてルーブリックを作成すること、生徒が思考した内容を評価していくために思考の変遷を読み取ることができるワークシートを作成することなどを中心に研究を進めていきたい。